

Title	イタリアにおけるフェミニズム運動の新たな動向 : 世代間継承の可能性
Author(s)	伊田, 久美子
Citation	架橋するフェミニズム : 歴史・性・暴力. 2018, p. 53-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68082
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

イタリアにおけるフェミニズム運動の新たな動向 ——世代間継承の可能性

伊田久美子

(大阪府立大学人間社会システム科学研究科)

牟田和恵 (編) 『架橋するフェミニズム—歴史・性・暴力』 第5章

2018.3.20 電子書籍版刊行

<https://doi.org/10.18910/67844>

ISBN978-4-87974-740-2 C3836

JSPS 科学研究費基盤 (B) 課題番号 26283013

イタリアにおけるフェミニズム運動の新たな動向—世代間継承の可能性

伊田久美子

はじめに：近過去形の歴史

近年男女雇用機会均等法をめぐる女性労働運動、さらにはジェンダー研究第1世代の経験や成果を次世代に引き継ぐ、という取り組みが相次いでいる。70年代以降の運動からおよそ半世紀を経て、これらの運動や研究動向の「歴史化」が進行していると言えるだろう。当事者だった人々、同じ時代を生きた世代の大半はまだまだ存命である。しかしこの世代の運動がその後継承されているかと言えば、必ずしもそう言える状況にないからこそ、継承が目指されるのである。現象的には90年代に各地に設置された女性センターや男女共同参画センターの事業、女性運動の多様な運動体、女性学、ジェンダー関連学会などが世代を超えて受け継がれているとは言えず、活動の危機に直面する団体も少なくない。そして若い世代の女性・ジェンダーイシューへの無関心や全般的「保守化」を懸念する言説も、先行世代の危機意識とともに流布している。

本稿はよく似た状況にあったイタリアのフェミニズム運動の近年の新しい展開を、世代の断絶と世代間継承の課題に注目しながら概観し、日本の状況への新たな視点を示唆することを目指している。

「近過去」*passato prossimo*とはイタリア語文法において、現在につながる文脈における、現在と切り離し難い、にもかかわらず現在とは区別される過去を表す。「継承」とは、世代経験の近過去としての歴史化に他ならない。しかしもちろん歴史化とは事実の中立的記録ではなく、多様な解釈の間の正統性をめぐる闘争のプロセスである。イタリアにおけるフェミニズムの新たな展開は、近過去形の歴史の継承をめぐる闘争としての側面を持っている。イタリア語の「歴史」*storia*は「物語」と同じ語である。歴史は客観的な記録ではありえない過去の再構築であり、ある視点からの物語に他ならない。そして当然物語はひとつではなく、継承は先人の語りの従順な傾聴ではありえない。

本稿の構成は次の通りである。第1節で近年のイタリアにおけるフェミニズム運動の新たな展開を概観し、第2節で多様な課題の中でも最も焦点化した課題として女性に対する暴力への取り組みの現状と課題を検討する。第3節では若い世代の登場を、ボローニャ、トリノ、ローマの事例を中心に紹介する。第4節で、世代間継承という問題設定の内包する問題を指摘し、そこからの解放としての歴史構築の作用と意義を示唆する。

1. 広場に戻ってきた女たち—イタリアにおける近年の新たなフェミニズム運動

1970年代には第2の波と呼ばれるフェミニズム運動の拡がりが見られ、女性問題は国際政治課題として取り扱われるようになった。イタリアでは強力なフェミニズム運動が各地で大規模な街頭行動を組織し、多くの女性たちが広場と街頭を埋め尽くした。様々な対立や矛盾はありながらも、左派政党や議会外左翼勢力との連携も推進し、離婚法（1970年）、家長権を廃止する家族法改正（1975年）、男女雇用機会均等法（1977年）、中絶の権利を認める法律（1978年）、名誉犯罪の廃止（1981年）などの目覚ましい成果を挙げて来た。

近年イタリアの女性運動は新たな盛り上がりを見せ、女性たちは再び広場に戻って来た。本節ではこの新たなうねりを牽引した代表的な運動として、*Se non ora quando?*（今でなければいつ？）の合い言葉による全国規模の女性の行動を中心に、およそ40年のブランクを経て再開されたフェミニスト全国大会 *Paestum2012* の動向も含めて概観する。

1.1 *Se non ora quando?*（今でなければいつ？）

2011年2月13日はイタリアの政治状況を揺さぶる記念すべき日となった。イタリア全国の広場が「*Se non ora quando?*」（今でなければいつ？）というスローガンを掲げた女たちに埋め尽くされた。230以上の都市（同日付コリエレ・デラ・セーラ紙）で150万人以上の女性が街頭行動に参加した。ローマ、ミラノ、ナポリでは10万人、パレルモでは2万人、トリエステ、バーリ、ペーザロ、ベルガモ、ジェノヴァで数千人、さらにはブリュッセル、パリ、バルセロナ、ニューヨーク、東

京^{注1)}など、国外でも約50都市で女性たちの抗議行動があった。性的スキャンダルにまみれた当時の首相ベルルスコーニに対する痛烈な抗議行動は「歴史に残る一日となるだろう」(同日付イル・ファット・クォティディアーノ紙)と言われた。私たちはまずこの動員力に目を奪われる。今もウェブ上で7年前のこの日の各地のデモンストレーションを夥しい画像や動画で見ることができる。

2月13日の行動が呼びかけられたのは僅か1ヶ月前の1月20日、特徴的なキーワードはliberta' (自由)とdignita' (尊厳)であった。「イタリア女性の尊厳」とはベルルスコーニの言動に象徴される女性の性的道具化が踏みにじってきたものであり、数多くのスキャンダルの挙げ句に愛人を男女機会均等大臣にする、ヨーロッパ議会の議員に政治経験のほとんどない女性を推薦する^{注2)}等の行為を通じて、能力発揮よりはセクシーな容姿を磨き、権力者に気に入られることの方が社会的上昇につながる、という女性蔑視と女性の道具化の政治状況に対する痛烈な怒りを表している。

これは単にベルルスコーニ個人の言動や倫理観の問題ではなく、それに象徴される政治や社会、とりわけメディアのあり方への怒りの表明であった。すでに2009年にジャーナリストのロレッタ・ザナルドらが制作したドキュメンタリー作品「Il corpo delle donne(女の身体)」^{注3)}が公開され、大きな反響を呼んでいた。この作品はイタリアの主要チャンネルのテレビ番組における女性像および女性身体の性的表象としての道具的扱いを告発するもので、ザナルドのブログには夥しい共感のコメントが寄せられていた。テレビにおける女性表象のセクシズムと代表的テレビ局の経営者であり、イタリアのメディアを支配するベルルスコーニの思想や行動は明らかに同質のものであり、ベルルスコーニに代表される性差別的メディア文化がベルルスコーニの言動を通じてイタリアの政治を直接的に左右するまでに至ったと言える。

2011年2月13日の全国行動はこのような政治状況に対する女性の不満が爆発したものであり、「これ以上我慢できない」という女性の憤懣を表明したスローガンが「Se non ora quando? (今でなければいつ?)」(以下Snoq)であった。わずか1ヶ月前からのウェブサイトやSNS等による呼びかけの結果が全国230以上の広場での150万人を超える人々の動員を実現したのである。当日の全国紙は各地の行動を詳細に伝えている。上述のイル・ファット・クォティディアーノ紙は各地のデモの様子を詳細に伝えている。ミラノでは多くの女性たちが今までの時代を葬送して喪に付すことを意味する白いショールをまとい、ナポリでは白いシャツを来ていた。トリノでは女性たちは「私たち女に投げられた泥を避けるため」と書かれた色とりどりの傘をさして歩き、Rai(国営放送局)の前で激しい抗議のシュプレヒコールを行った。さらにヴェネツィア、パトリ、パレルモ、トリエステ、ペーザロ、インペリア、カリアリなど、半島の北から南、そしてシチリアやサルデーニャを含む全国各地での、またブリュッセルでの、それぞれに特色ある行動を詳細に伝えている。政府関係者の「一部の過激派」「頑固な昔の活動家」といったラベリングによる抗議運動の矮小化^{注4)}は、政権への打撃の深刻さを示していると言える。結局ベルルスコーニはこの年の11月に退陣に追い込まれることになる。

この運動は自然発生的な、雑多な集まりである。均質で閉鎖的な政治集団は存在せず、70年代フェミニズム世代から若年層まで多様な世代が個人や友人の小グループとして参加している。デモ行進は整然としているが、活気があり、明快で挑発的なスローガンが溢れている。そして政党や組織の旗は見当たらない。イタリアは昔から人々の街頭行動が盛んな国であったが、政治集団の旗のないデモンストレーションはなかった。

この運動は組織化の質や方法において、明らかに「昔の運動」とは異なるものであった。世代を超えて普段は出会わない人々が多様な個人のまま、ひとつのスローガンを共有して行動する。広場で次々に壇上に上がり発言するのは著名人やいわゆる活動家だけではなく、日頃は街頭行動に参加することなどなかった、ごく普通の女性たち、そして男性たちであった。貧困女性の支援を行う修道女のような「保守的」とされる聖職者から、ラディカルな労働運動に共鳴する女性非正規雇用者(プレカリア)まで、思想的背景も世代も多様な女性たち、および女性の訴えを支持する男性たちであった^{注5)}。この日の街頭行動は量的にも質的にもかつてなかった新しい運動スタイルを実現したと言える。

行動を呼びかけ牽引した女性たちの動きはすでに1年半前に開始されていた^{注6)}。ベルルスコーニの性的スキャンダルと女性の性的利用に汚染された政治に対してこれ以上黙っていることができなくなったローマの女性たちが2009年に集まり、異議申立ての行動を検討し始めていた。それはプライベートな集まりから始まった。テレビドラマで活躍する女優ルネッタ・サビーノとアンナ・カラベッタが作家のフランチェスカ・イツォに呼びかけ、多くの女性文化人や有識者とともにグループを結成したのだ^{注7)}。「Di nuovo(もう一度)」と名乗ったこのグループは、女優、映画監督、ジャーナリスト、研究者等々、多様な背景と経歴の女性たちであった。行動の趣旨はフランチェスカ・イツォにより「La nostra liberta' (私たちの自由)」と題して起草された。

このグループの最初の行動は、2010年7月の演劇上演であった。立ち上げメンバーには著名な映画監督もいれば、人気女優もいた。彼女らの職能を活かした方法として、演劇の上演に取り組んだのである。映画監督のクリスティーナ・コメンチーニが脚本を書いた演劇「Libere（自由な女たち）」は、自由の意味をめぐる若い女性と年配の女性の対話によって構成され、二人の女性を女優のルネッタ・サビーノとイザベッラ・ラゴネーセが演じた。マスコミはほとんど取りあげなかったが、口コミによって情報は拡がり、思いがけなくも劇場は入りきれないほどの観客で溢れた。その中には7-80年代に活躍したフェミニストたち（「歴史的フェミニスト」と呼ばれる）や女性政治家もいた。エンディングの背景にはエネルギーに溢れた70年代フェミニズム運動の画像が拡がり、「自由」を連呼する歌が流れた^{注9)}。

Di Nuovo「もう一度」という名称は、新たな始まりと再帰を共に表すべく採用された¹⁾。メンバーの多くは70年代フェミニズムを経験してきた世代である。彼女らはフェミニズムの再生が必要であると考えてる一方で、社会を変えて行くためには新たな運動スタイルが必要であることを痛感してもいた。

「Libere(自由な女たち)」は異なる世代の女の対話である。かつてのフェミニズム運動の限界を振り返る中から世代間の矛盾や対立を超えて、現在の課題に向き合おうというメッセージが込められている。70年代フェミニズムは大きな成果を残したが、今日世代の違いを始め、多様な女性、そして男性にも連携を拡大しなければ、その主張が社会を変えうる政治的交渉力を持ち得ないという認識が、この新たな運動の立ち上げには共有されていたのである。それはまず第1に、分離主義からの脱却であった。

1.2 「歴史的」フェミニズムの隘路を超える

今日「歴史的」と呼ばれるフェミニストたちは総じて、左翼勢力と同様に、首相の「私生活」に踏み込んで保守反動のモラリストのように見られることを恐れ、ベルルスコーニの性的乱行と女性蔑視の言動を積極的に批判しようとはしなかった。この沈黙への苛立ちが「もう一度」グループを結成させたのである。新しい運動は「歴史的」フェミニズムの分離主義を批判し、世代、性別、政治的宗教的思想信条などを超えた横断的ネットワークの形成を呼びかけた。

イタリアの70年代フェミニズム運動は離婚、中絶、家長権の廃止を含む家族法改正などの大きな成果をあげた。しかし小グループに閉じこもる分離主義と内省的意識変革の運動スタイルは、社会に向けた発信力を弱体化させ、とくに若い女性たちとの接点を失ってきた。新しい運動は均質で緊密な関係によって組織される小グループではなく、多様でゆるやかな、基本的に個人単位のネットワークを特徴としていた。また既成政党や労働組合などの組織的参加を認めず、課題を共有できる多様な立場の人々の横断的連携を目指した。その呼びかけは若い世代、保守派や宗教家、そして伝統的分離主義を超えて性の平等を望む男性にも向けられた。そしてそれは確かに今までのフェミニズムが届くことのなかった層へと届くことになった。

ローマでの上演の成功により、「Libere（自由な女たち）」の上演が各地で要請されるようになった。10月1日にトリノのカリニャーノ劇場で^{注9)}、続く3日にはミラノのフランコ・パレンティ劇場で、大盛況のうちに上演され^{注10)}、その後ナポリでも上演された。上演後には観客との長い活気溢れるディスカッションが続いた。小グループの要請にはDVDを送った。ついには政党や労働組合からも要請が来た。人々の高まる関心が、既成組織を動かすという、伝統的な組織員とは真逆の展開であった。^{注11)}

1.3 「今でなければいつ？」全国行動とその後の Snoq

“Di nuovo”のメンバーが2月13日の全国行動の呼びかけを決めたのは1月13日、わずか1ヶ月ほど前のことであった。この呼びかけ文のタイトルが“Se non ora quando?”（今でなければいつ？）であり、その後全国に広がった運動の名称となったのである。

メッセージは政党、宗教、イデオロギー、性別、そして世代を超えて横断的に伝搬した。ブログを開設し発信を始めると、サイトはユーザーからのコメントで溢れ、事務局には返信しきれないほどのメールが届いた。マスコミがほとんど取りあげない中、オンライン・ジャーナルは積極的に報じてくれた。全国の多様な人々への情報の波及にはSNSを含むオンラインによる情報拡散の効果がきわめて大きかった。若い世代は積極的にメッセージを拡散した。

ローマの呼びかけグループへは全国各地からのコンタクトが相次いだ。ローマ・グループは地元での行動を要請し、Snoq

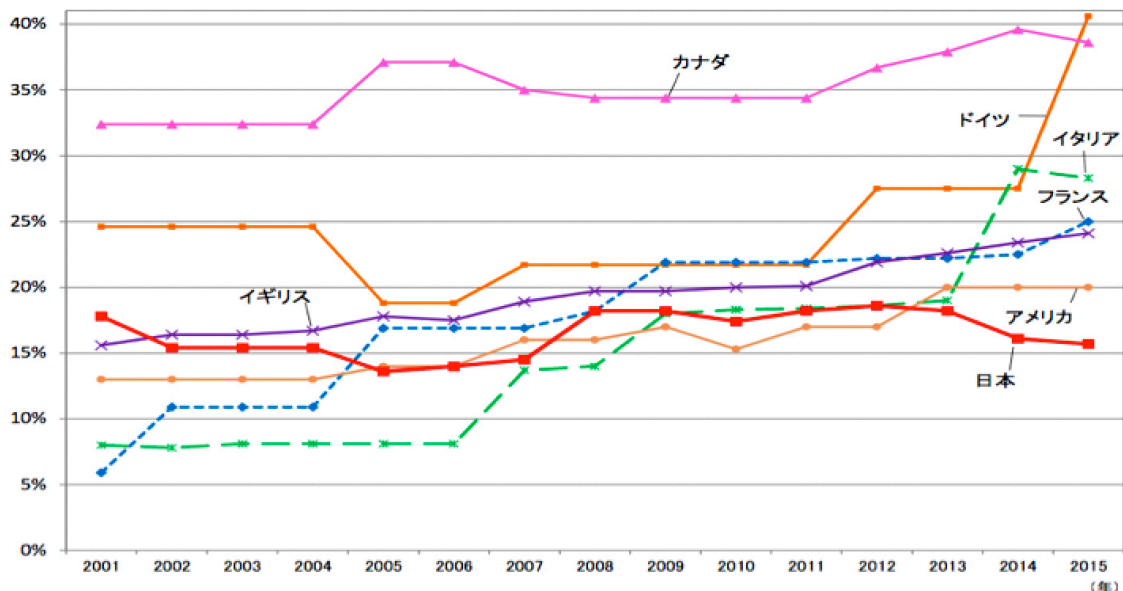
1) non ora quando? La storia, 1-3)。

のロゴを送った。その際に政党や労組などの組織的参加は認めず、誰もが個人として参加することなどを申し合わせた。街頭行動の経験のない人々からの問い合わせにはデモの許可の取り方までも教えた。今までの街頭行動の参加者とは明らかに異なる層の人々が動いていたのであった。

しかし横断的ネットワークの困難は早くに顕在化する。2011年2月13日の行動の後、各地で立ち上げられたSnoq支部の強い希望により、同年7月にSnoq全国集会在イタリア中部のシエナで開催された。しかしボンジョルノら保守派の女性政治家たちの発言に参加者からのブーイングが起これ、彼女らはその後Snoqの集會に参加しなくなった^{注12)}。多様性、横断性の困難が早くも現れた。

Snoqのもっとも重要な要求は女性の代表制の推進であった^{注13)}。ベルルスコーニ退陣後に組閣したモンティの内閣には3名の女性閣僚が実現した。2012年にSnoqは女性と男性の対等な政治参加を要求する行動を推進し、ボローニャ、ミラノで代表性についての討論を行い、内閣をはじめ、地方行政府、州議会、国会でのジェンダー平等な代表性を要求する運動を展開した。人口の半分は女性なのだからクォーター制^{注14)}どころか“50-50”を目標とすることがSnoqの主張であった。

イタリアは女性の政治参加が極めて遅れていた国であったが、2013年2月の総選挙では女性の議員比率は急増し、下院は31.4%、上院は29.0%と、選挙前よりそれぞれ10%増加した。2014年に組閣したレンツィ内閣では、女性閣僚は半数に及び、女性の政治的プレゼンスは著しく拡大した。



【図1】国立国会図書館（2015）より：G7諸国議会上院の女性議員比率の推移（2001～2015年）

イタリアでは、2012年に政党候補者数において一方の性が3分の2を超えている場合は政党国庫補助が5%減額されるとの措置（法律第96号）が導入されたが、それ以上に民主党と5つ星運動が候補者名簿の上位に女性を登載した影響が大きいと言われている（国立国会図書館2015）。しかし立法措置にせよ、政党の候補者名簿の変化にせよ、2011年からのSnoqの大衆的運動がなければ、このように速やかな変化は実現しなかったであろう。Snoqが要求してきた女性の代表権は大きく前進したのである。

Snoqの運動は、個人を基本にしたゆるやかで多様なネットワークを運動の基盤とすることによって、多くの人々の自発的動員に成功し女性の政治的発言権を確立した。もはや女性を無視できない情勢を背景に、交渉力を発揮できるようになったと言える。Snoqのメンバーから政界で活躍する女性たちも出ている。現ジェンティローニ内閣の文部大臣、ヴァレリア・フェデーリはSnoq立ち上げ時からのメンバーである。

1.4 フェミニスト全国大会（パエストウム2012）：「歴史的」フェミニズムの再生

一方70年代フェミニズム運動の文字通りの再来というべき動きはSnoqの全国行動の後に生じた。2012年10月5,6,7日の3日間、ナポリの南のパエストウム（ペストウム）で、1000人も女性が集うフェミニスト全国大会が開催されたのである。

パエストゥムは1976年に3回目のフェミニスト全国集会が行われた地である^{注15)}。その後全国集会はこの2012年まで開催されることはなかった。「政治的経済的危機の時代を生き延びるために、フェミニストは社会変革に挑戦するのだ、必要なのは革命だ！」という思い切った呼びかけと、パエストゥムの古代遺跡の有名なフレスコ画「跳び込む男」のパロディ「跳び込む女」のポスター（図2）から、呼びかけたフェミニストたちの心意気が伝わってくる^{注16)}。

この大会案内は宿泊やら会場へのアクセスの案内はとても親切だが、驚いたことにプログラムはまったく決まっていないう、というより存在しない。すでに開会の数ヶ月前から大会ブログには一般参加者のメッセージがたくさん届いているが、大会そのものも、有名人の基調講演も分科会も予定されず、だれもが好きなように発言できる場がめざされていた。安易に收拾をつけようとせず、世代、人種、地域など、女の中の違いや対立に向き合おうとする果敢な方針が示されている。

この大会の呼びかけもウェブとSNSの効果に大きく依拠していた。登録者へのメルマガでの発信とHPによる情報提供に加えて、大会前後の長い期間のウェブでの意見交換の継続は、かつての運動にはなかったことである。また集会の様子はHP上にたくさんの画像や動画で紹介されているが、参加者による報告もウェブ上に溢れ、情報が多元的に配信されることもまた新しい現象である。しかし大会運営のこの仕切りのなさは、「歴史的」とされてきた70年代フェミニズムの特徴そのものである。



【図2】フェミニスト全国大会（パエストゥム2012）のポスター。「跳び込む女 パエストゥム21世紀」と記されている。

この36年ぶりの全国大会を呼びかけたのはミラノで活動を経て来た「歴史的」フェミニストのグループである。フェミニスト全国大会の長い「ブランク」には1970年代後半期のテロリズムに向かう危機的な情勢の中での政治運動の衰退など様々な事情があったと思われるが、そもそもミラノにおいて主流となった均質な小グループによる内省的意識変革運動（autocoscienza）は、全国レベルで結集し交流することによって社会的プレゼンスを高めるような動きとは真逆の志向性を持っていたことは確実である。しかし70年代フェミニズム運動の資料アーカイブの形成にいち早く取り組んできたのもこの潮流である。そしてこうした運動に70年代フェミニズムの「歴史」を代表させる70年代フェミニズム史が、80年代以降に構築されてきたのである^{注17)}。

2012年の全国大会開催の呼びかけには、おそらくは1年前からのSnoqの目覚ましい動きに触発されるところが大きかったのではないだろうか。Di Nuovoとしての立ち上げ時から、「歴史的」フェミニストたちは、Snoqの運動、とりわけその反分離主義を厳しく批判し、Snoqは「歴史的」フェミニズムとの差別化を明確にしてきた。しかし歴史的運動スタイルを変え

て全国集会を呼びかけるという新たな動きには Snoq の運動による影響が窺えるのである。パエストゥムの「跳び込む男」は遺跡の墓所の棺の裏に描かれている。この男の行動はスポーツとしての跳び込みではなく、来世へのジャンプであると言われているが、36年を経てのフェミニスト全国集会がこの絵柄を採用したのは、内省的な活動を重ねて来た「歴史的」フェミニストたちが、生存自体を脅かされる近年の危機的情勢を前に、政治的行動に踏み切る、その「思い切り」を意味しているのかもしれない。

2. 女性に対する暴力との闘いの焦点化：女性殺害（femminicidio）の告発

政治変革とならんで、新しい女性運動の焦点となった課題は、女性に対する暴力との闘いである。とりわけその究極の形態である女性殺害（フェミサイド：イタリア語は *femminicidio*）に反対する運動はこの時期大きな盛り上がりを見せ、性暴力の位置づけを変更する刑法改正を実現し、また政府統計の集計や分析にも大きな影響を与えた。本節では女性に対する暴力との闘いについて、イタリアの歴史的背景と70年代フェミニズム以来の運動状況も振り返りながら、近年の新しい動向を検討する。

2.1 女性の人権のグローバルな社会問題化とイタリアの歴史的背景

女性に対する暴力との闘いはすでに70年代フェミニズムの時代から取り組まれていたが、90年代に入ると、女性運動によって全国各地に救援センターが作られ、国際社会の動向や女性運動の働きかけによって、90年代には政府や行政の取り組みも進んだ。1996年には性暴力を従来の公序良俗に反する位置づけから、人間の自由を犯す人権侵害の犯罪へと変更する刑法改正を行い、2001年には家庭内における暴力に対処する法律を策定すると共に、経済的に困難な状況の被害女性の国家による保護が定められた。2009年には性暴力の罰則強化とともにストーキングの犯罪化が導入された。

こうした動きは90年代以降の国連やEUのグローバルな取り組みに呼応したものである^{注18)}が、女性運動のボランタリーな取り組みが先行していることは多くの国において共通である。民間シェルターや相談窓口などの被害者救済の活動は民間先行で進められているが、行政は支援の立場にとどまり、その支援も不十分であると言わざるをえない。民間に多くを頼っているがゆえに、行政の取り組みは地方によって大きなばらつきがある。

女性に対する暴力との闘いは新しいものではない。イタリアにはファシスト時代の1920年に成立したロッコ法と呼ばれる刑法によって、家族の名誉を守るための配偶者、姉妹の殺害は *delitto d' onore* (名誉犯罪) と定義され、その罰則は一般の殺人に比べて非常に軽いものであった。また性暴力については *matrimonio riparatore* (修復結婚：加害者が被害者と結婚すれば無罪となる) の規程があり、被害者の家族は名誉のためにそれを望むことが当然とされていた。しかし、1965年にシチリアで強姦の被害を受けた18歳のフランカ・ヴィオラは史上初めて加害者との結婚を拒絶して加害者を訴え、加害者は11年の刑に服した^{注19)}。70年代フェミニズム運動^{注20)}を経て、この差別的法律は1981年になってようやく廃止された。しかし強姦が1人の人間に対する人権や自由の侵害ではなく公序良俗を乱す犯罪とされる刑法上の位置づけの抜本的な変更は、1979年以来要求されながら、1996年の性暴力禁止法の成立を待たねばならなかった^{注21)}。

1970年代の終わりには各地に「女の家」やフェミニズム運動の資料館などの女性の「場」が作られ、それらの施設は暴力被害者のシェルターや救援活動の拠点の役割も担うようになっていった。女性は決して受動的に救済を待つ無力な被害者ではなく、相互援助活動を展開し、政治的要求の主体としての動きを作ってきたのである。1996年の女性に対する性暴力の位置づけの抜本の変更を実現したのは、1970年代フェミニズムから継続してきた草の根の女性の運動であったと言える (Balsamo, 2004)。1990年代後半期のウィーンにおける世界人権会議や北京における第4回世界女性会議を経て、女性に対する暴力は政策が取り組むべき重要課題として位置づけられるようになった。

イタリアでは1997年にEUの助成による「都市部反暴力ネットワーク」プロジェクトが内閣府機会均等局によって開始され、ネットワークは当初の8都市から2002年にはトリノを含む26都市へと拡大した。このプロジェクトは各都市で暴力についてのアクション・リサーチを実施し、実態把握と人々の問題意識形成を進め、地方にネットワークを広げること、および、警察、病院、福祉機関など行政の関連部署の連携の構築をめざした^{注22)}。

2.2 反暴力キャンペーンの新展開：女性殺害（femminicidio）の告発

femminicidio は夫、元夫、恋人、父親、兄弟などの家族や親密な関係にある男による女性殺害を示す 1990 年代の英語の造語 femicide (Russel&Radford 1992) のイタリア語である。この造語は中南米では早くから用いられていた^{注23)}。この課題への取り組みを牽引したのは Snoq である。2011 年の年末にシチリアでメンバーの若い女性が恋人に殺害されたことを契機として、Snoq は 2012 年に国会議員のファブリツィア・ジュリアーニを中心に femminicidio の問題に取り組むグループを立ち上げ、ジュリアーニが起草した呼びかけ「“Mai piu’ complici” (これ以上共犯者にはならない)」によって署名活動を展開した。このキャンペーンはトリノやボルツァーノなどの活発な支部をはじめとして、全国の Snoq によって取り組まれた。クリスティーナ・コメンチーニは femminicidio を題材とした演劇 L’ amavo piu’ della sua vita (「私は彼女を、彼女の生命より愛していた」) を書き下ろし、Snoq トリノ支部の代表の弁護士ラウラ・オノーフリによるトリノでの上演をはじめ、Snoq 各地の支部が上演した^{注24)}。

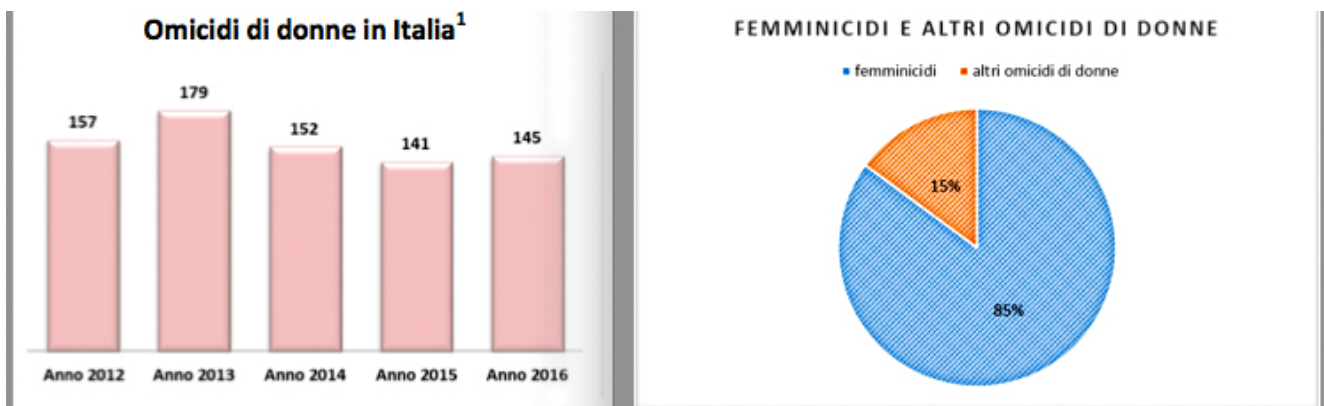
Femminicidio に反対するキャンペーン “Mai piu’ complici” は大学教育研究省 (MIUR: Ministero dell’ Istruzione dell’ Universita e della Ricerche) との連携によって推進され、この作品は上演や DVD 上映などによって大学での教材として用いられ、現在に至るまで活発な討論の機会を作っている。

このキャンペーンにはサッカー界が全面的に協力した。2012 年 6 月 2 日にはオスティアで女性ナショナルリーグによる femminicidio 反対キャンペーンが行われた。さらに男性ナショナルチーム Azzurri の参加がそれに続いた。同年 11 月 14 日、ナショナルチームのサッカーの試合に” La violenza sulle donne e’ problema degli uomini (女性に対する暴力は男性問題である)”と書かれた横幕を持ち込み、試合のホイッスルの前に、ジュリアーニが起草したメッセージが女優ルネッタ・サヴィーノによって朗読され、イタリア国营放送 (Rai) がそれを放映した。スポーツ界の連携は、Snoq メンバーで全国女性アスリート協会会長をつとめるルイザ・リッツィテッリの尽力により実現し、労働社会政策省、および、暴力被害者支援電話ホットライン Telefono Rosa (バラ色の電話)^{注25)} が後援した。

2013 年、EU のイスタンブール条約の批准とともに、女性に対する暴力防止法の改正が行われ、femminicidio に対する対策、すなわち被害者と親密な関係にあった加害者に対する厳罰化も盛り込まれた。そのためこの法律改正は、「反 femminicidio 法」と呼ばれることとなった。

2.3 femminicidio のカテゴリー化と統計データ

Snoq は、femminicidio という犯罪カテゴリーの確立を要求することによって、女性に対する究極の暴力の実態の解明を政府に要請した。femminicidio という語と概念の普及は確実に政治的な効果を発揮した。イタリア法務省はイタリア統計局 (ISTAT) とともに、2010 年以降の女性殺害事件に関する判決を調査集計し、報告書「イタリアにおける femminicidio に関する統計分析調査」(Bartolomeo, 2016) を発表した。それによるとイタリアでは毎年 150 人前後の女性殺害事件が発生し、「この 4 年間でおよそ 600 人の女性が殺害されている。イタリアではおよそ 2 日に 1 人の女性が殺されていることになる」



【図3】左：過去5年間の女性殺害事件数 右：femminicidi（親密な関係における殺人）の被害者は女性殺害事件全体の85%を占めている。\\出所：F.Bartolomeo, Ministero della giustizia, ” Inchiesta con analisi statistica sul femminicidio in Italia. URL: <http://www.istat.it/it/violenza-sulle-donne/il-percorso-giudiziario/condanne>.

(ibid.)。さらに女性が犠牲者である殺人事件の加害者との関係を調べると、実に85%が親密な関係にある男が加害者であり、*femminicidio*と定義される事件であることが明らかになった。

法務省とイタリア統計局によるデータ集計報告は、イタリア社会にかなりの衝撃を与えた。マスコミの注目度は高まり、代表的週刊誌エスプレッソは、この報告を受けて詳細な紹介記事を掲載し(2017年6月21日付)、深刻な現状とともに、反暴力の活動を行うセンターの多くが資金難によって閉鎖されていることを伝えている。しかし2011年のSnoqによる女性たちの大規模な街頭行動以降、女性議員や閣僚は顕著に増加し、内閣や議会の要職に女性が就くことはもはや珍しくなく、*femminicidio*をはじめとする反暴力キャンペーンへの政策的取り組みは前進している。2017年11月25日の女性に対する暴力に反対する国際デーを控えて、下院議長ラウラ・ボルドリーニは暴力を振るわないマジョリティの男性に「沈黙を破」って運動に加わるよう呼びかけた。昨年末の2017年12月21日には、*femminicidio*により母親が殺害された孤児の養育援助を定めるなど、法律や制度の整備は前進している。Snoqの*femminicidio*キャンペーン活動は、女性に対する暴力についてのメッセージを広く社会に伝え、政治を動かし、社会問題としての政策的取り組みの進展に大いに貢献した。

3. 世代間断絶と若い世代の登場

女性の活動は70年代を継承し、90年代以降は行政によるサポートも、十分とは言えないまでも実現してきた。しかし活動の担い手もサービスの利用者も一定の世代にとどまり、若い世代はフェミニズムへの関心を失っているとされてきた。

しかし、2011年以降の新たな運動では若い世代が前景に登場するようになってきた。Snoqの政治変革キャンペーンや女性に対する暴力に反対する行動にも、パエストゥムのフェミニスト全国大会にも、10代から2、30代の女性たちが積極的に参加している。この節ではボローニャ、トリノ、ローマの事例から、若い世代の登場を概観する。

2013年3月9日付のラ・レプブリカ紙は、ボローニャにおける女子高校生によるフラッシュ・モブを紹介している。ミングェッティ人文系高等学校の女子高校生たちは、2011年に、フリーダ・カーロの名にちなんで「フリーダ」と名乗るグループを結成し、反暴力キャンペーンに立ち上がり、2012年3月8日の国際女性デーに初めて街頭行動に参加した。長年フェミニストの行動で見かけることがなくなっていた若者の登場である。

2013年のフラッシュ・モブには<次の犠牲者は私かもしれない>をスローガンに、80名もの高校生が、前年の*femminicidio*の犠牲者124名の名前を書いたプラカードを一人一人が掲げて行進した。「歴史的」フェミニスト世代よりはるかに若い母親たちも娘とともに参加した。この年の10月に*femminicidio*の厳罰化を含む刑法改正が成立する。

近年世界中で女性に対する暴力反対国際デーの11月25日には様々なイベントが行われ、女性に対する暴力に反対するキャンペーンが展開される。イタリアでもこの日は各地で広場などで暴力の犠牲を表す赤い靴のモニュメントが展示され、赤い色やオレンジ色を身につけた女性たちの街頭行動が行われる。赤い色、オレンジ色は被害者の犠牲を示す反暴力のメッセージである。

トリノでは70年代から活動を継続している女性運動グループは、いつもほとんど同じ世代の同じようなメンバーで運営されてきた。しかしSnoq以降の政治参加や反暴力の取り組みは、若い世代によって新たな展開を見せている。

図5は2015年11月25日のトリノ中央駅構内でのフラッシュ・モブである。大勢の参加者と新聞社やテレビのカメラの前でオレンジ色を身につけてダンスを披露しているのは、Snoqトリノ支部の女性たちの娘たちである。彼女たちはこの日に向けてダンスの練習を重ねてきた。親世代のまるで発表会を見に来たようなまなざしと応援も新鮮であった。娘たちは女性に対する暴力を人ごとではないと感じている。

パエストゥムの全国フェミニスト大会からもローマの若手フェミニスト・グループが誕生した。フェミニスト全国大会は翌2013年以降も2016年まで開催された。2013年の大会では、2012年にパエストゥムで出会い結成したというFeministe Nove^{注26)}(F9新しいフェミニストたち)と名乗るローマの若い女性グループが登場し、今日「歴史的」と呼ばれる70年代フェミニストに対する挑戦的メッセージを込めたマニフェストを発表した。「新しいフェミニスト」とは、従来のフェミニズムの継承者ではなく、交替要員でもないこと、不安定労働者である自分たち自身から始めることを意味している。そして自分たちは今という困難な時代に立ち向かう「歴史的フェミニスト」であると名乗っている。

Siamo femministe nove. Non siamo ereditiere, siamo precarie. 私たちは新しいフェミニストである。私たちは相続人ではなく、不安定労働者(プレカリエ)だ。



【図4】犠牲者の名前を掲げて行進する女子高校生 La Repubblica 2013年3月9日。最前列のプラカードは「ロレダーナ・ボスカーニ 50歳、兄弟に絞殺された」と書かれている。

Non siamo staffette, siamo partigiane. 私たちは交替要員ではなく、パルチザンだ。

F9のマニフェストは、後に70年代から続く女性学の雑誌であるDWF(DonnaWomanFemme) n. 98, 2013に、その全文が掲載された。雑誌編集部による解説は、このマニフェストのトーンが70年代のautocoscienza(意識変革の実践)に類似している、と述べている。たとえばマニフェストは自分たち自身からの出発を原点とすると宣言しているが、この原点自体が「歴史的」と呼ばれるフェミニズムの特徴であり、それはとっくに言われ、実践されてきたことなのである。しかし現代の若い世代の「私たち」は70年代の「私たち」ではない。時代状況は大きく異なる。かつて今も失業問題は深刻であるが、70年代の労働と異なり、今日の若者はまさに「不安定」(プレカリエ)な状況の中で生きて行かねばならない。1970年代フェミニズムを担った女性たちは、教師、研究者などの比較的安定した、運動を継続する余力のある人々であった。しかし労働



【図5】 トリノ中央駅構内にて2015年11月25日 筆者撮影

者の権利がまだ守られているイタリアにおいても、若い世代の労働の不安定化は著しく、高学歴の若者の多くは英語圏をはじめとする国外に職を求め、イタリアを出て行くのである。国内にとどまる若者の多くは失業と不安定就労にさらされている。労働だけでなく、運動の条件も大きく異なる。

図6はF9の2015年のメーデーの時のもので、横断幕には「私たちは嵐（テンペスト）の娘だ。お前たちの海を荒らしてやる」と書かれている。メーデーのマニフェストで、この若い女性集団は次のように主張する。

「不安定性」（プレカリエタ）は、ある状況についての集合的意識などではなく、広く出現している状況そのものである。それは個別の貧困そのものの孤独な認識として広がっている心的状況である。政治的言説はそれを再吸収すべき緊急事態、あるいは取り除くべき吹き出物であるかのように語るが、「プレカリエタ」はその政治的言説自身が作り出し予測していたものである。……「プレカリエタ」はアイデンティティではなく、私たちが生きている場であり、対立や自由の実践を構築する場である。私たちはこれを取り除きたいのではなく、変革したいのである。（Manifesto Femministe Nove, 1 maggio 2015）

manifesto femministe nove



Ricordiamo il Primo maggio pubblicando uno stralcio del manifesto di femministe nove:

【図6】 Femministe nove のメーデーでの街頭行動 2015年5月1日 <https://laboratoriodonnae.wordpress.com/2015/04/29/manifesto-femministe-nove/>

4. 世代間継承の再考

なぜ多くの社会運動は自らの経験を続く世代に伝えたい、継承したいと思うのだろうか。また運動の何を伝えたいと思うのだろうか。運動の経験は正当で理にかなった素晴らしいことばかりではない。むしろ社会運動の歩みは本来闘うべき政治権力との対峙以上に、内部対立と分裂に溢れている。「歩み」とは目的地に向かって進むことだ。「歩み」とは「前進」を前提とした表現である。私たちは目的地を共有しているのだろうか。いや私たちは「前進」しているのだろうか？先に歩んだ人たちに続いていかなければならないのだろうか？

「私たち」ではなく「私」から始めるのだ、と70年代の「歴史的」フェミニズムは主張し、「私」を容易に「私たち」に変換してしまう運動と自らを差別化した。「平等」を求める *emancipazione* ではなく「差異」の自由を求める *liberazione* がスローガンであった。世間や親や男から指図されない自由、自分の人生を自分で決める自由、限られた選択肢からであっても自ら判断する自由、選択肢の束縛から自らを解放する自由、それを女性が自ら主張してもいいのだ、自分のことは自分で決めてもいいのだ、ということを経験するまでには多くの葛藤がある。「絆」と呼ばれる血縁や地縁は、私が自ら選び取ったものではない。人生は運命ではなく、自ら決断していくものだ。

共通の束縛を被りながら孤立してきた女たちにとって、「女」という主語の獲得は画期的であった。親や夫や子どもなどの「家族」と自分の区別をつけるとき、初めて「女」という主語が獲得される。「私たち」が「私」を消去しないことが必

要なのだ。イタリア語の複数形は、女性集団にたったひとりでも男性が混じれば男性複数形で表される。男性の代表性が女性を消去してしまうのだ。70年代フェミニズムは分離主義を必要とした。分離しなければ、女性複数形の「私たち」は存在できなかったのである。

その後イタリア語文法が変化したわけではない。しかし Snoq は分離主義の克服の姿勢を明確にし、「歴史的」フェミニズムを批判した。70年代のフェミニストで代表的なフェミニスト誌の一つであった Rosa^{註27)} の主催グループに属していたフランチェスカ・イツォは、Snoq 立ち上げ宣言は、自らもその一翼を担ってきた70年代の「歴史的」フェミニズムの自己批判からの出発であると述べている^{註28)}。

Snoq の呼びかけメンバーに共通しているのは、「歴史的」フェミニズムの限界を超えたいという意味であった。そして Snoq は確かに社会を、特に政治を動かす力を発揮しうる運動へと成長した。そして見解を異にする「歴史的」フェミニズムのあり方にも確実に影響を与えている。

Snoq は、かつてのフェミニズム運動や政治運動とは無縁な、デモになどくことのなかった人々を自然発生的に動員することに成功した。政党、イデオロギー、労働組合などの既成の枠組みを超えた横断的スタイルを確立し、右派や宗教団体とも連携することができ、それによって政治的に無視されえない交渉力、影響力を獲得した。異なる世代の女たちの、また男たちとの連携も当初からの Snoq の目標であったが、実際街頭行動には、母と娘、息子、そして男たちが共に参加してきた。

この柔軟でフラットなネットワーク型の運動は、共通の課題によって自然発生的に形成され、離散、収束するが、また新たな呼びかけに応じて登場するだろう。Snoq もまた多くの社会運動と同様に、その横断性を長く維持することはできず、2012年に当初の横断的な幅広い運動を継続し、政策にコミットしていこうとする Snoq : Libere と、政策から一定の距離をとって課題に取り組もうとする Snoq : Factory の二つのグループへと分裂した。今日イタリア社会の抱える政治的社会的課題は多い。貧困、労働、移民問題、右翼の台頭などの困難な状況下で女性もまた多様な課題を抱えている。しかし「歴史的」フェミニズムの分離主義と一線を画した Snoq の経験が示唆することは、多様な個人へと開かれた運動こそが社会変革のポテンシャルを発揮しうるのであり、また多様な個人が単位であるなら、組織的継続や引き継ぎはそれほど重要ではなく、新たな運動の誕生への希望を持つことができるということではないだろうか。

結びにかえて

運動の継承とは何だろう？「バトン」の受け取り手が現れないことは残念なことだろうか。しかしバトンをそのまま受け取ることは難しく、受け取ろうとすれば、その負担は半端ではない。むしろ継承の拒否によって、運動は新たなスタイルで、新たな情勢に向き合って登場する。かつての運動が歴史化されることにより正統性と権威をまとうことになったとしても、それを覆す新たな運動によって、過去もまた再構築される。多様な解釈に開かれた歴史の再構築こそが継承と呼ばれるべき営為であり、「バトン」は必ずしも渡される必要はない。たとえ降り出しに戻ったとしても、その降り出しは、かつての降り出しとは決して同じではないからである。

【付記】

本稿は、平成26-29年度科学研究費基盤(B)研究課題「ジェンダー平等社会の実現に資する研究と運動の架橋とネットワーク」(課題番号26283013)の助成を受けた研究成果の一部である。

<https://doi.org/10.18910/67844>

文 献

- Amabile Flavia, “Sono tornate in piazza le donne di Se non ora quando? Quando è nato il movimento?,” *La Stampa*, 12-12-2011.
- Balsamo Franca et al. (a cura di), 2004, *Violenza contro le donne: percezioni, esperienze e confini*, Torino, Isfol.
- Balsamo Franca (a cura di), 2010, *Violenza contro le donne in luoghi difficili: una rete tra le città’ di Gaza-Haifa-Torino*, Torino: Regione Piemonte.
- Bartolomeo Fabio (a cura di), 2017, *Inchiesta con analisi statistica sul femminicidio in Italia*, Roma: Ministero della giustizia-

Direzione generale di statistica e analisi organizzativa.

Cavallari Rita, Robiony Simonetta, 2015, *Se non ora quando?—La STORIA, Chi siamo e cosa vogliamo*, <http://www.cheliberta.it/category/se-non-ora-quando-la-storia/>

Il fatto quotidiano, 2011, “Il riscatto delle donne, ma non solo: Oltre un milione di persone in 100 piazze,” *Il fatto quotidiano*, 13-2-2011.

—, 2011, “Le donne di “Se non ora, quando?” tornano in piazza. “Mai piu’ senza di noi,” *Il fatto quotidiano*, 30-11-2011.

Iossa Mariolina, 2011, “Protesta di piazza, e’ il giorno delle donne,” *Corriere della sera*, 13-2-2011.

Izzo Francesca, Davoglio Elisa, Sapegno Maria Serena, De Clementi Andreina, Fiorino Vinzia, 2011, “Se non ora, quando?” Tavola rotonda, *Genesis*, X/1, Roma: Viella, 177-190.

Marconi Federica, “Femminicidi in aumento, quest’ anno sono gia’ 114. Boldrini” Uomini uscite dal silenzio,” *L’ Espresso*, 23-11-2017.

Melandri Lea, 2011, “Non siamo l’ esercito della salvezza” , *Corriere della sera*, 13-2-2011.

Muraro Luisa, 2011, “Il grande errore e’ andare in piazza per conto di altri,” *Corriere della sera*, 10-2-2011.

Rete antiviolenza tra le citta’ urban, 2004, *Italia, Violenza contro le donne: percezioni, esperienze e donfini*, Torino: Comune di Torino.

Rosa Elena, 2017, エレナ・ローザ「イタリアの広告に見る女性身体表象のステレオタイプ」伊田久美子訳・編『女性学研究：大阪府立大学女性学研究センター論集』（24）, 39-56.

Russell Diana E.H. & Radford Jill, 1992, *Femicide: The Politics of Women Killing*, New York: Twayne Publisher.

Sassen Saskia, 1998, *Globalization and its Discontents*, New York: New Press. (=2004, 田淵太一・原田太津男・尹春志訳『グローバル空間の政治経済学：都市・移民・情報化』岩波書店.)

Torlone Giulia, “Ogni due giorni una donna viene uccisa dal compagno. I numeri della violenza di genere,” *L’ Espresso*, 21-6-2017.

Zanardo Lorella, 2010, *Il corpo delle donne*, Milano: Feltrinelli.

芦田淳, 2013, 「政党国庫補助の抑制と透明性向上の試み」『論究ジュリスト』No. 4: 102-103.

伊田久美子, 2014, 「70年代イタリア・フェミニズム史の再検討：家事労働賃金要求運動を中心に」『女性学研究：大阪府立大学女性学研究センター論集』（21）, 93-119.

伊田久美子, 2015, 「七〇年代イタリア・フェミニズムにおける家事労働賃金要求運動：「労働」の定義をめぐる闘いとその「消去」」『世界人権問題研究センター研究紀要』, 215-257.

伊田久美子, 2017, 「新自由主義とフェミニズム：女性主体の視点から」『ジェンダー研究：Journal of gender studies, Ochanomizu University：お茶の水女子大学ジェンダー研究所年報』（20）, 35-43.

国立国会図書館, 2015, 『「女性国会議員比率の動向」調査と情報』—Issue brief- Number 883.

Abstract

A New Phase of Feminism in Italy: Rethinking Inter-Generational Succession in Women’ s Movements

Kumiko Ida

This paper considers the recent situation in Italy focusing on the relationship between generations.

40 years have passed since the ground swell of the “second wave” of feminism in the ’ 70s, and it is now being discussed how the movements should be updated, as gender equality has not been realized and many issues remain to be dealt with. In Japan a series of initiatives, such as conferences, documentary films and books, have been organized to commemorate and to make an

archive of the feminist movements and gender studies of the older generation. The movements of the '70s are now being historicized.

Recently in Italy a new wave of women's movements has emerged and made an extraordinary upsurge, mobilizing over a million women in more than 230 cities. The movement named *Se non ora quando?* (If not now, when?), opposed the sexism of the then prime minister Berlusconi, and required the "dignity and freedom" of women in the political scene. Another important issue of the movement was opposition to femicide (*Femminicidio*).

The movement successfully mobilized different generations, achieving the election of more than 30% women lawmakers in 2013, and in 2014 a cabinet in which half of the ministers were women.

The movement could organize in particular women of the younger generation. The relationship between generations and the changes in the movements are examined, to serve as a reference for rethinking the possibility of the inter-generational succession of feminist movements.

Key words: Italy, *se non ora quando*, *femminicidio*, dignity, freedom, young feminists

注 釈 一 覧

イタリアにおけるフェミニズム運動の新たな動向—世代間継承の可能性

- 1) 日本でもイタリア文化会館前で集会が開催された。参加した兩宮処凛氏のブログにその様子が記されている。<http://www.magazine9.jp/karin/110216/> 2017年12月26日閲覧) (p. 2)
- 2) ベルルスコーニに群がる女性たちの中には政治家に抜擢された者もいる。代表的なケースを挙げると、モデルでベルルスコーニの愛人であったマラ・カルファーニャは機会均等大臣 (!) に就任した。(p. 2)
- 3) ザナルドのブログに公開されている。<http://www.ilcorpodelledonne.net/documentario/> (p. 2)
- 4) 文部大臣(当時) マリアステッラ・ジェルミーニとベルルスコーニの与党 PDL の下院議員代表ファブリツィオ・チッキットの発言である (La Stampa, 2011年12月12日)。もちろん大手新聞報道がこの種のラベリングに便乗することはなかった。(p. 2)
- 5) この運動の焦点は政治への異議申立てに当てられていたことは明白であるが、Snoq の要求はベルルスコーニに代表される女性を侮辱する政治にノーを突きつけるだけでなく、母親および父親の出産休暇と補償の充実や解雇防止規程、そして一般財源の負担による出産費用の保障など、女性の労働をめぐる要求が多くを占めていた。続く3月8日国際女性デーの全国行動では夥しい女性たちが職場での差別の経験を次々に訴えた (La Stampa, 2011年12月12日)。(p. 2)
- 6) 雑誌 Genesis 2011年11月号に呼びかけ人たちのインタビューが掲載されている。(p. 2)
- 7) この行動が著名な女優たちの呼びかけから始まったことは興味深い。ベルルスコーニの政治やメディアの女性差別文化に彼女らはもっとも晒され脅かされていた女性たちであった。(p. 2)
- 8) Grace Slick の「Manhole」。”libertad” が連呼される。(p. 3)
- 9) 弁護士のラウラ・オノーフリとジャーナリストのステファネッラ・カンパーナがオーガナイズした。こうした各地の上演グループが Snoq 支部を形成していくことになる。(p. 3)
- 10) ミラノには「歴史的」フェミニストのグループが健在で、そうしたフェミニストたちからの “Libere” への批判もあった。ルイザ・ムラーロとレア・メランドリは dignita’ (尊厳) というスローガンに保守的なモラリストのニュアンスを見出し、Corriere della sera 紙上で厳しく批判した。(p. 3)
- 11) 2月13日の行動にはイタリア総同盟 (Cgil) 書記長のスザンナ・カムツォ、保守政治家のジュリア・ボンジョルノ、イタリア最大のカトリック女性組織 (Unione Superiore Maggiori d’ Italia) の修道女エウジェニア・ボネッティまでもが参加した。(p. 3)
- 12) ボンジョルノは、しかし、Snoq への批判的見解を述べることもなく、黙って姿を消すことにより、Snoq への暗黙の連帯を示した。(p. 4)
- 13) 「Mai piu’ senza di noi(もはや私たち女性抜き政治はあり得ない)」は Snoq のスローガンのひとつであった。(p. 4)
- 14) イタリアでは quote rosa と呼ばれている。“rosa” (ばら色) はしばしば女性を表す。Snoq のロゴの背景もばら色である。色彩のジェンダーバイアスはあまり議論されないように見える。(p. 4)
- 15) 第1回、第2回はピナレッツァ・ディ・チェルヴィアで1974年、1975年に開催された。(p. 5)
- 16) 70年代イタリアフェミニズムの資料の中には、芸術的な、あるいはユーモラスなイラストやポスターの類がたくさんある。このポスターも近い将来には貴重な歴史資料として、資料館に保存されることになるだろう。イベントを景気付け、参加者の心に残り続けるだけでなく、女の経験を歴史として生き延びさせていくために、ポスターやイラストは有効であり重要である。(p. 5)
- 17) イタリア70年代フェミニズム史の構築については、伊田 (2014, 2015) を参照されたい。(p. 5)
- 18) サスキア・サッセンは女性の人権の社会問題化をグローバリゼーションの観点から分析している (Sassen 1998=2004)。サッセンの分析に着想を得た日本のフェミニズム分析 (伊田 2017) も参照されたい。(p. 6)
- 19) 当時のマスコミは「彼女と結婚する勇気のある男はいないから、彼女は生涯独身のままだろう」と書き立てたが、実際は2年後に結婚し、故郷で平穩に暮らした。もともとマフィアと関わりのあった加害者は出所後2年目にマフィアに殺害された。(p. 6)
- 20) 1976年ローマで大規模なフェミニストの夜のデモンストレーション「Riprendiamoci la notte(夜を取り戻そう)」が行われた。(p. 6)
- 21) 日本では未だにこの変更はなされていない。(p. 6)
- 22) トリノでの活動は、トリノ大学女性学学際センター (Centro Interdisciplinare degli Studi delle donne: CIRSDe) が担った。(p. 6)
- 23) グアテマラの法 Law against Femicide and other Forms of Violence against Women (2008) やメキシコの法 Law on Access of Women to a Life Free of Violence (2007) でこの語が用いられている。国連は Handbook for Legislation on Violence against Women (2010) で、女性に対する暴力の形態のひとつに femicide/femicide を挙げ、次のように定義している。

Femicide is an extreme form of violence that culminates in the murder of women and may include torture, mutilation, cruelty, and sexual violence. (UN 2010:23-24) (p. 7)
- 24) とくに活発な支部として、トリノ、ボルツァーノ、ウーディネ、ジェノヴァ、ヴェローナ、ボローニャ、モデナ、フィレンツェ、シエナ、アンコーナ、ナポリ、ラ・ロクリダ、サッサリ、シラクァ、ラ・ブーリア・コン・パッレッタ、ブルサーノ、チェリニョーラが挙げられる。北部だけでなく、保守的とされる南部にも展開している。(p. 7)
- 25) 1988年にボランティアで活動を開始し、全国からの相談に応じている。1993年に労働社会政策省によって第3セクターの認定を受け、全国組織に発展した。各地で電話相談および相談窓口での相談事業を担っている。女性だけでなく、高齢者や若者など、暴力に悩む人はだれでも相談できる。(p. 7)
- 26) “nove” は “9” の意であるが、“nuove” (新しい) の女性複数形でもある。(p. 8)
- 27) これは「ばら色」ではなくローザ・ルクセンブルグに因んでの名称であった。(p. 12)

- 28) イッツォを含む Snoq 立ち上げの中心メンバーへのインタビューが2011年の Genesis 誌に掲載されているが、そこでも「歴史的」フェミニズムへの評価や差別化についての編集サイドの批判的な質問やコメントが散見される。(p. 12)